

日本学術会議の在り方に関する政策討議（第5回）
（総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会）

議事概要

- 日 時 令和3年10月28日（木） 11：00～12：16
- 場 所 中央合同庁舎8号館 6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員（Web）、小谷議員（Web）、佐藤委員、
篠原議員（Web）、橋本議員、藤井議員（Web）、梶田議員
（事務局）
大塚内閣府審議官、松尾事務局長、米田統括官、井上事務局長補、
覺道審議官、合田審議官、阿蘇審議官、高原審議官、橋爪参事官
（大臣官房総合政策推進室）
笹川室長、黒瀬審議官、児玉参事官
（日本学術会議）
菱田副会長、高村副会長、望月副会長、小林幹事（会長アドバイザー）、
三上事務局長
- 議題 日本学術会議 改革の進捗状況について
「日本学術会議のより良い役割発揮にむけて」について意見交換等
【非公開】

○ 議事概要

午前11時00分 開会

○上山議員 それでは、ただいまより第5回日本学術会議の在り方に関する政策討議として、総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を始めます。

本日は、内閣府から大臣官房総合政策推進室、日本学術会議事務局に参加をいただいております。なお、小林大臣は御都合により御出席されません。

それでは、議事に入ります。

なお、会議の記録及び会議の公開・非公開については、第1回の政策討議で決めたとおりと

いたします。また、前回の政策討議の議事概要は、有識者議員の皆様に御確認いただき、既に公表されたものと承知しております。

本日の議題は、日本学術会議改革の進捗状況について及び「日本学術会議のより良い役割発揮にむけて」の2点についての意見交換等でございます。

まずは改革の進捗状況について、日本学術会議からの御説明をお願いいたします。

では、梶田会長からよろしくお願いをいたします。

○梶田議員 ありがとうございます。

それでは、資料1を御覧ください。

本日は、「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」の中で記載した改革案のうち、機能強化に関連する項目について進捗状況のアップデートと、関連して10月に実施した会員との意見交換会について簡単に報告いたします。

1ページをおめくりください。

具体的な進捗状況なのですが、以下説明してまいります、前々回の8月5日に報告しておりますので、本日は基本的にそれ以降の進捗を中心に説明いたします。

まず、1番が国際活動の強化です。ちなみにこの順番は、簡単に言えばプライオリティで順番を付けています。まず1番、国際活動の強化ですが、国際学術団体に役員レベルで参加拡大を追求ということで、これについては嬉しいことに本日も御出席されています小谷先生が次期会長、そして、白波瀬先生が財務担当副会長ということで、international Science Councilで今後御活躍いただけるということとなりました。

それから、これに関連しまして国際活動全体を俯瞰した連携強化の戦略・対応ということで、このニュースを受けまして、国際活動の戦略に関する検討を開始しているところです。

続きまして、次のページ、2ページを御覧ください。

2番目が意思の表出と科学的助言機能の強化ですが、これについては既に報告しましたように、提言については今後総合的・俯瞰的あるいは中長期的観点の大きなテーマにシフトをしていくと、そういう方向性です。その一つの仕掛けとして連絡会議というのを設置したということとは既に報告しました。

それに加えて、会長、幹事会が主導した課題設定、横断的審議、意思の表出につきまして意見交換を10月に実施しましたので、これにつきまして後ほど6ページ以降で説明いたします。

続きまして、(3)対話を通じた情報発信力の強化ですが、まず2番目、産業界、専門職団

体等との連携について、8月以降、公立大学協会、日本私立大学連盟、日本私立大学協会との意見交換を実施し、今後も必要に応じて意見交換をしていくということで合意しています。

続いて、国民との対話、学術フォーラム・公開シンポジウム等の動画配信の推進ですが、この業務を担っていただきます広報関係者として学術会議アドバイザーを委嘱しております。それから、10月、いろいろとありましたので、積極的に会長談話とかメッセージ動画の発信、記者会見等を行っております。

4ページ目ですが、会員選考も一つのアジェンダですが、これについて会員候補選考に関する説明責任の強化ということで、これも10月の意見交換会のテーマの一つとして行いましたので、後ほど報告いたします。

では、続きまして、5ページを御覧ください。

会員との意見交換の概要についてということですが、今回、10月5日から7日、90分×7回の意見交換会を行いました。参加した会員の方は、幹事会構成員を除いて126名です。加えて10月13と18日に分科会の委員長等を務める連携会員62名の方にも提言等の見直しについての説明会を行い、意見も頂くということで実施しました。

そして、より良い役割発揮の中で考えた提言活動の見直しの具体案を6月に幹事会で議論し、また、その内容について会員に通知し、8月の各部の部会、第1部、第2部、第3部の部会で議論をしていただいて、それを踏まえて修正して、今回の意見交換会を行ったということです。このように我々としては、日本学術会議というのはボランタリーでボトムアップの科学者の組織であるということを前提に丁寧な議論をして合意を得るということを目指しており、12月の総会で決めていきたいと考えております。

この意見交換会の議題ですが、提言等の見直しに関することと会員選考の説明責任の強化でした。具体的には、提言について総合的・俯瞰的・中長期的視点での大きなテーマでの提言活動にシフトするために、今後提言は学術会議全体を発出主体としてこのような大きいテーマについて発出するというにすると。一方で、分科会等もいろいろな議論をしますが、そこからの発出については、基本的には新たに見解というカテゴリーを設けて、そのような形で発出するか、あるいは報告のような形にさせていただくということで提案いたしました。

これにつきまして、このページ、(1)会員からの意見の傾向ということでもまとめておりますが、この見直し案について賛同する意見が大勢でした。ただし、具体的な取組を進めるに当たっては、提言等の見直しや会員選考プロセスの見直しなどについて更なる検討や配慮を求め

る意見がございました。

その幾つかを（２）提言等の見直しに関する主な意見ということで紹介させていただきますと、二つ目の○ですが、提言は中長期的視点俯瞰的視野分野横断的なものとし、学術を代表する意見として発出することに賛同。課題設定の段階から幹事会による調整を行いながら進めるという方向性はよい。４番目の○で、職務の独立性を留意した上で、提言等の作成に当たり関係省庁等と意見交換を行うことは非常に有意義。続いて、適切な情報発信とともに、提言等がどのように活用されたかを確認することが必要である。出しっぱなしにするのではないということです。緊急に科学的助言を求められる際に、機動的に対応できる仕組みを構築しておいたほうがよい。最後、提言等の発出に特化しないような分科会活動の見直しや分科会の再編成が必要であるということに同意。他方、分野ごとの分科会によるボトムアップの活動や意見の多様性が学術会議の特徴であるから、分科会機能との両立を図るべきであるという意見もあります。

次のページ、６ページですが、会員選考プロセスの見直しに関する主な意見を幾つか紹介させていただきます。

基本方針や選考方針を定めて具体的な基準や手続を明確化することに賛同する。その際、次期の課題を設定し、学術会議会員として求められる会員像をあらかじめ明らかにしておく必要がある。他方、次期の活動を前の期が縛ってしまうことがないように配慮が必要である。続いて、学術会議の独立性に留意しつつ、会員選考に関する基本的な方針を定めるに当たり、外部の有識者の意見を聴くことは有意義。他方、どのような分野の有識者に、どのような基準でお願いするかについては、慎重な検討が必要であろう。分野のバランスや多様性を担保した上で、既存の分野だけでなく、学際分野や新分野から会員候補者を選考することは重要というような意見を頂いております。

その他の自由に意見を頂いたのが幾つかまとめられておりますが、本日は割愛させていただきます。

最後に、最後のページに国際活動の重要性についてということで１ページ入れさせていただきました。これは何かと申しますと、皆さん重々承知のとおりですが、学術の世界では国際的な連携がますます重要になっております。そういう現在、日本の科学者の内外を代表する機関である学術会議にとって、国際活動が非常に重要なものであるということをここでおうとしたということです。具体的には既に報告してありますので説明は省きますが、今後も国際学術

団体や各国アカデミーとの交流、連携を強化していきたいというふうに考えております。

以上です。

○上山議員 ありがとうございました。時間の関係から質疑は次の議題で一括して行うことにいたします。

次は、日本学術会議は本年4月22日に取りまとめた「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」につきまして、取りまとめに至る議論の経緯、背景や問題意識について御紹介を頂き、議論したいと考えております。これまで非公開とする場合においては、C S T I 有識者議員本人と政策討議の事務局以外の同席、傍聴は一切認めないとしてきたところでございますが、本日は日本学術会議から梶田会長に加え、報告を取りまとめられた菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹部に特別に参加を頂きたいと考えておりますが、皆様の御承認を頂きたいと思います。いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

それでは、御承認していただいたと考えて、ここからは率直な意見交換の確保のために非公開とさせていただきたいと思っております。

菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事並びに事務局を除きましてC S T I 有識者議員以外の同席者・随行者も御退席をお願いいたします。プレスの皆さんもここで御退席をお願い申し上げます。

C S T I 有識者議員同士のディスカッション部分の議事概要の扱いにならない、後日、発言者名を伏せたものを公表させていただきたいと考えております。

【プレス・同席者・随行者 退室】

○ それでは、まず日本学術会議から取りまとめに至る議論の経緯等について、資料2「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」に関する補足説明を基に報告を頂きます。また、日本学術会議の状況をまとめた資料4、日本学術会議関係資料を合わせて配付させていただいております。その次に、私から主要国アカデミーの助言活動についての資料3を配付いたします。それについて事務局から説明をさせていただきます。その後、意見交換を行いたいと考えております。

なお、意見交換に資するため、これまでの政策討議の意見交換をまとめた資料5、日本学術

会議の在り方に関する政策討議における主な意見等、資料6、当面の論点も併せて配付をさせていただきます。

それでは、よろしくお願いします。まずは報告取りまとめの経緯、カーボンニュートラルについて御説明を頂きます。よろしくお願いいたします。

○ 本日はこのような説明の機会を頂きまして、誠にありがとうございます。

資料2の項目に従って簡単に御説明をさせていただきます。

詳細なことに關しては、また質疑応答の中で御説明できればというふうに思っておりますけれども、まず補足説明の1と2に関しては他の方から報告させていただきたいと思います。

まず、背景を説明する前に日本学術会議についてですけれども、我々は全員非常勤でありまして、組織としては普通の部局のような形の業務命令の効かないフラットな組織をしております。先ほど梶田会長の説明もありましたように、総会を最高議決機関として全会員が平等な立場での運営を主としておりますので、非常に時間の掛かるプロセスを今やってきております。それで、更に専門性を有する常勤スタッフのいないような組織、これは海外アカデミーとも大きな違いでございますけれども、それを今運営しているという状況であるということをまず申し上げます。

それから、作成の背景・文脈なんですけれども、もちろん25期が発足後、6人の任命問題がございまして、その後、不正確な事実に基づかない情報の発信等もあり、学術会議としては政府の改革論の提起、それから、自民党のPTの検討の状況を始め、目まぐるしい対応を迫られた状況にありまして、普通であれば委員会を設置し、十分議論して進めるのでありますけれども、今期は10月11日から幹事会の下に緊急ワーキングを設置いたしまして、随時そこで議論し進める形になっております。これはここでの検討内容は非公式な会議も含めて、合計32回開催しております。ただ、ここの内容は全て会員に関して意見を聴くような骨子を作るときに、幹事会などでその案を議論する前のたたき台を作り上げていくという形になります。

それから、任命問題に関する対応は大変難しく、会員の方も非常にいろんな意見が出ているのも事実であります。これは、我々としてはなるべく早い時期に解決することを強く望んでおり、十分な対話ができる状態になればというふうなことを希望しています。

それから、会員とこの「より良い役割発揮に向けて」文書ですけれども、井上大臣との折衝の間で大臣の設問に対しての回答の形、それを会員に説明する形で書かれておりますので、そういうふうにして見ていただければと思います。

それから、組織の設置形態についてですが、在り方についての議論を我々の方で相当進めてまいった段階で、井上大臣から設置形態についてもフラットにお願いしたいということがございまして、その時点でこの緊急ワーキングの中で検討をし始め、現在に至っている次第であります。この10月11日に始まる頃に2003年からのこの学会議に関係する在り方の議事録を全て読んでいただきまして、誰がどういうふうな発言をしてどういうことをやって、どういう検討をなされたのか、そこを十分分析した上で議論をし、それで、設置形態も含めてフラットな形で記述することを行いました。その中で、まず骨子を作り、骨子を会員に聞き、会員の中の意見を集約した形で現状に至っております。主要メンバーは、四役の会長、副会長と3部長でありますけれども、大変な時間を費やしたというのは先ほど御説明したとおりであります。

それから、この議論の過程でありますけれども、ほぼインフォーマルなものでブレインストーミング的にキーワードを抽出し、会員に見せる形でまず会員に意見を聴き、さらに、12月には学協会との懇談会、それから、分野別の委員長の懇談を含めて、さらに、設置形態に関しては行政法の専門家と2回ほど詳細についても議論し、現在に至っております。その後、この3月には、4月総会で承認を得るために会員との計8回のZoomの会議をし、114人から意見を聴いております。

ただ、意見の聴き方も会員全員から聴くための工夫は非常に苦労しておりまして、1人の方が長くしゃべるとどうしてもバイアスが掛かりますので、広くフラットに聴くような努力をして今の現在に至っております。

それであと、この井上大臣との面会の後に自民党PTとの隔たりについては認識しておりますけれども、我々としては十分な検討をした結果として今の設置形態に至る要件についても改めて議論し、抽出したということになります。改革の基本姿勢等については、あとは別の方から御説明願えればと思います。

○ それでは、3の執筆の方針から説明をいたします。

全体の構成での留意点ということを書いておりますが、今説明がありましたように大臣の要請によって設置形態についてフラットに議論してほしいと、そういう要請がございましたので、それに対する直接の回答をまず冒頭に持っていくべきだということで、こういう構成になっております。当初はまた違った構成も考えておりましたが、やはりお答えするという部分を最初に置こうということでもあります。

そして、それ以降が学術会議主体の改革案というもので整理してございます。先ほど言いましたように、過去2回の政府の議論、その議事録も全部私は読みました。こういうものが前提になって建設的な議論になるのだらうと思いますので、そこは出発点かと思っております。

ボリュームに関しましては、これでも可能な限りコンパクトにしたつもりですが、本来ならばもっと丁寧に長文が必要だったと感じております。そして、現在実施中の会員との意見交換では、その報告書に書いた内容を具体化してインプリメントするための案を作成して、それを提示して議論していると、そういう状況でございます。

それから、5要件についてこのレジュメには書いてございませんが、いろいろと御議論があるかと思うので、我々の考え方を説明しておきたいと思います。

これは幹事会メンバーを中心に改めて各国のナショナル・アカデミーの成り立ち、制度的基盤、財政構造、運用実態等を比較分析するということはしております。過去の分析をした論文なども参照しております。その上での我々の理解としては、それぞれの国の学術の歴史や制度の生態系の違いがあり、アカデミーの在り方は多様ではあるが、その中でこういう項目が共通の重要な理念として理解されていると日本学術会議は立論し主張しているのでございます。したがって、当然反論はあり得ますが、その場合には議論をさせていただきたいと考えております。何か客観的なアカデミーの本質なるものがどこかに規定されていて、それを発見したというタイプの議論ではございません。ここは正に日本学術会議として論陣を張っているというふうに御理解いただきたいと思います。

それから、改革の基本姿勢、ここでは現状の問題点の把握ということで、この5点を書いております。詳細については報告書を見ていただきたいと思いますと思いますが、提言の在り方に関しましては、従来のボトムアップ型、そして、そういうものだけではなく、新たに「見解」という概念を作っていくということをしております。それは、学術会議全体として3部の構造を持っていることによってこそ価値のあるものという分野を横断したようなものを「提言」というふうにいたしまして、各分野からのボトムアップのものについては「見解」という形で整理したい。しかし、この「見解」はボトムアップ的な提案に加えて、世の中で社会的に討議される際に参照される枠組みとして提供できるようなものにしたいと考えております。世の中で議論が分裂する、対立するような場面でどのような整理ができるかということを示すのも学術会議の非常に重要な役割だと考えておりますので、「見解」という概念を新たに作るというふうに考えております。

会員選考に関しましては、もう既に書いてございますように「優れた研究又は業績がある科学者」という法の規定がございます。そして、コ・オペレーションという理念、これは世界のアカデミーの共通の考え方でございますので、それを踏まえた上でどの程度社会的な観点や御意見を反映した仕組みが作れるかというところを工夫しているところでございます。

それから、海外のアカデミーの動向については時間がございませんので、端的に申します。明らかに21世紀になってから科学的助言機能の強化というものが大きな流れになっております。それに対して積極的に対応していこうという考え方でございます。

そして、時間軸あるいは我々の立場、責任というものを考えた場合に、我々の今の改革の基本姿勢というのは、航海中の船を航海しつつ換装していくと。つまりゼロリセットでドックに上げて全部作り直すというのではなく、航海中の船を換装していくと、そういうやり方で議論をしているということでございます。

そして、このような議論で改革を考えていったときに、本来ならば資源の増加等が必要になりますが、4月の時点では、その面についてはできる限り抑制的な記述にとどめました。それは当時の状況をお考えいただければ御理解いただけるものと信じます。しかし、本当にこのような改革を実現するためには、資源の増加は必須であります。会員は全員非常勤で本務校があり、そして、手当ても若干のものであり、研究機能を持っていない組織である。そして、業務命令が一切効かないと、そういう組織体であることは是非御理解いただきたいと思います。

5番目、海外との比較における注意点、これは各論をやりますと時間が全然足りませんので、非常に一般的なことを申し上げます。

各国のアカデミーがそれぞれの異なる歴史と政治体制を持っているということは既に指摘しているとおりであります。日本の場合には、世界最初の発展途上国として上からの近代化を実行した経緯が刻印されております。したがって、異なる生態系の中のパーツだけを取り出して国際比較をするということは、必ずしも生産的ではございません。ただ、生態系全体の改革という大所高所の議論はあり得ますし、私はそれが一定必要だというふうに考える者でございますが、それは簡単にはできるものではない、また、その実現に要する手順と時間軸を十分に考慮すべきではないかというふうに考えております。機能面と、それから、設置形態について簡単に申し上げます。

機能面については、5要件は設置の条件でございしますが、機能面に関しては幾つかの機能を日本学術会議は持っていないということだけ申し上げておきます。顕彰機能、これは日本学士

院の方に行っております。それから、ファンディングの機能、これはJ S TとJ S P Sの方で担当されております。それ以外に各省庁が多数の審議会を作る、これが日本の生態系でございます。その中で学術会議はどういう役割を果たすべきかということで、中長期的・俯瞰的かつ3部制のメリットがある、社会的に大きな議論に対する提言をするという形で大きく変化をさせようとしております。

それから、設置形態に関しまして、これも簡単に申し上げます。

各国のアカデミーの場合に、国と独立した法人であるということが本質ではありません。そうではなくて、勅令や大統領令あるいは法律などを根拠に学術を代表する「特別の唯一の存在である」ということがエッセンスでございます。そして、より良い役割発揮報告書で挙げたアカデミーの5要件というのは、そのことを表現しようとしたものであります。したがって、このような特性を日本の統治行政制度の中で実現しようとした場合に、内閣総理大臣の所轄する国の特別の機関という形態を取ってきたというのが経緯であるというふうに理解しております。

したがって、その部分の改革についてはまた別途きちとした議論をされるべきではないかというふうに思います。

最後に付け加えますが、20年前の学術会議の在り方に関する専門調査会のときには、C S T Iと学術会議の関係といった議論がなされておりました。それから随分状況が変わってまいりましたので、改めて日本の学術を考える上でC S T Iや、学術会議の関係も改めて議論することができれば本来望ましいのではないかというふうに思っております。

財源等の議論は御質問等があればまたお話ししたいと思います。私の方としては以上でございます。ありがとうございました。

○ ありがとうございます。

私からはカーボンニュートラルに関わる連絡会議について口頭で御説明申し上げたいと思います。

先ほど梶田会長からありましたように、中長期的な視角を持って学術の諸領域が連携・協働し、総合的・俯瞰的な検討をする、そして、科学に基づく助言あるいは社会への発信をしていく、そのための一つの仕掛けとして連絡会議というのを立ち上げております。その最初のものがカーボンニュートラルに関する連絡会議でございます。これについては以前にこちらの会議に資料を提出させていただいているかと思います。

これまでの状況でございますけれども、参加を希望する委員会、分科会等によって連絡会議

を9月に立ち上げております。79の委員会、分科会等が参加をし、人文社会科学、生命科学、自然科学、工学、全ての領域をわたる委員会、分科会等が参加をしております。それを支える運営ワーキングは既に7月から審議を始めております。

こうした連絡会議、運営ワーキングの活動を通じて、それぞれの委員会、分科会等が検討する課題の有機的な連関を追求する動きが出てきていると思っております。例えば洋上風力と水産業、水産の振興といったようなテーマ、あるいは新技術をいかに社会の中に実装していくか、その際の法制度、社会の在り方について連携・協働して検討ができるのではないかなど、分科会、委員会の検討そのものがこうした横断的・俯瞰的な観点から進み始めているというふうに思っております。

同時に、連絡会議全体として大きな課題を持って議論すべきでないかという意見も出ております。例えば、研究者、経済界の皆様との非公式の意見交換の中でも、将来の脱炭素社会のビジョンや移行の在り方について横断的・俯瞰的な観点から提示をしていくべきではないかという意見もいただいております。こうした大きなテーマについて連絡会議の総力を使ってこれからいかに進めていけるかというのが課題でございます。

既に情報発信としてフォーラム、シンポジウムの開催のシリーズ化、一元化したホームページの立ち上げを行っているとともに、国際活動の中では、この間、G7のナショナル・アカデミーと協力をした共同の声明をネットゼロ、カーボンニュートラルで出しております。さらに、生物多様性と気候変動に関してIAP、国際学術団体の専門家の会合に派遣し、また、STSフォーラムのアカデミープレジデント会合でも今回カーボンニュートラルを一つのテーマとしております。

今後、学術会議の外にすでにあるカーボンニュートラルに関する知見とうまく結びつく形で、更に学術会議内部の議論を進め、学術の諸領域が連携協働して中長期的な視点から総合知を基に提言していく、そうした仕組みとして発展をさせていきたいというふうに考えております。

以上です。

○ ありがとうございました。

それでは、次に主要国アカデミーの助言活動について、事務局から御説明いただきます。

○ 資料3を御覧ください。

主要国でのアカデミーの助言活動として、「ナショナル・アカデミーの在り方に関する議論」、主要国等における「具体的な提言テーマ」、「助言活動のプロセス」について公表情報

を基に整理しております。概略を説明させていただきます。

まず、「ナショナル・アカデミーの在り方に関する議論」についてです。

2 ページ、各国政府に対して科学的助言を行う組織や助言者の国際的ネットワークである I N G S A で 2 0 1 7 年に開催されたワークショップ、「科学的助言におけるナショナル・アカデミーの役割」において、ナショナル・アカデミーの将来展望が述べられました。

簡単に紹介します。3 ページを御覧ください。

アカデミーは、科学コミュニティ以外の聴衆が増加することを認識する必要があるが、同時に新たな関係者の参画により科学的エビデンスや知見に対する信用構築—（再）—はありますが—を助けることが可能であるとされています。

4 ページを御覧ください。

下のほうに、アカデミーは社会的受容性が課題となる技術など論争となりやすい敏感な話題について、公の議論を設ける役割に適していることについておおむね合意がされた、また、そういった場を提供できるかというのがある種社会的信用の醸成につながるとされたところです。

次に、2、「具体的な提言テーマ」です。

6 ページ、「国際学術会議の実行計画」を御覧ください。

I S C においては、科学が対応すべきグローバル社会の主要な機会や課題は何か、国際協力を進めるべき新興分野は何かなど、継続的なアセスメントを踏まえ、行動計画に優先順位を付けなくてはならないとしています。I S C としてのプロジェクト、プログラムとしては、持続可能な 2 0 3 0 年開発アジェンダ、デジタル革命などが掲げられています。

7 ページ以降、説明は省略させていただきますけれども、1 6 ページまで I S C、全米科学アカデミー、英国王立協会、レオポルディーナ、S A P E A の最近の提言について取り上げさせていただきました。例えば Climate change: science and solutions などが提言として出されておるところでございます。

1 7 ページを御覧ください。

最後、「助言活動のプロセス」でございます。

まず、「全米科学アカデミーにおける助言活動の検討プロセス」について紹介します。

1 ポツ、「検討事項の明確化」です。スポンサー、助言依頼者と協働して検討事項を特定し、詳細な S t a t e m e n t o f T a s k、課題文書等を検討した上でガバニングボードで承認をするとなっています。

2 ポツ、「委員選定と承認」です。検討のための委員は専門性、構成バランス、利益相反等を考慮して人選がなされるということです。アカデミーの会員であることは考慮要素であると述べられています。

3 ポツです。情報収集等のところですが、情報収集は、公開会合、委員等による調査等を通じて実施されます。情報収集のための委員会は公開で実施をされるということです。他方、報告書策定に関する議論は、外部影響を排除するため非公開とされています。

4 ポツ、「報告書のレビュー」です。報告書案は運営委員会等から独立して任命されるレビューアーによる外部レビューを受けるとされています。検討すべき責任の範囲を逸脱していないか、科学的エビデンスに基づき客観的であるかなどが審査されます。こうしたプロセスを経て報告書が検討依頼者に送られることとなりますが、依頼者は内容を修正する機会是与えられないとされています。

18 ページ、19 ページは S t a t e m e n t o f T a s k の具体例です。説明は省略します。

20 ページ、21 ページです。「ドイツ国立科学アカデミー・レオポルディーナにおける助言活動のガイドライン」です。詳細な説明は省略させていただきますけれども、全米科学アカデミーのプロセスと近いものとなっていると考えております。

簡単ではございますが、私からの説明は以上です。

○ ありがとうございます。

それでは、これから意見交換とさせていただきます。御発言がございましたら挙手の方をお願いいたします。どなたでも結構ですが、いかがでいらっしゃいますか。

では、どうぞよろしくお願いいたします。

○ ありがとうございます。詳しく説明していただいたので理解が進みましたが、幾つか質問と感想を述べさせていただきたいと思っております。

まず、一番最初に資料1で進捗状況の御説明があったんですが、この進捗状況について学術会議としてはどのような自己評価をなさっているのかというのがまず1点目でございます。

2点目、今、コ・オペレーション方式の話がございましたけれども、一方で、資料1の中で、会員の中からも学際分野とか新分野から会員候補を選考することが重要という御意見が出ています。このことを考えたときに、コ・オペレーション方式の限界というものを感じていらっしゃ

やらないのかどうかというのが2点目の質問でございます。

3点目に、3部制のメリットを生かしというお話があったんですけども、私、正直申し上げて、今の最後の資料の17ページとを見ていても、現在課題になっている問題というのは分野をまたいで横断的にいろいろ検討していかなきゃいけないテーマがメインになっていると思っていますので、3部制のメリットというのは何なのかというのがちょっとよく分からなかったというのが3点目の質問でございます。

あと、4点目なんですけれども、今御報告のあった資料3の中でも例えば市民との議論の場を設けるとかいろんなことが書いてあったんですけども、一方で、アカデミーとして立論しているという非常に力強い言葉がありました。その言葉を聞いてしまうと、やはり国民との遊離というのがあるのかなと感じてしまうんですけども、その辺のお考えがどうなんだろうかというのが4点目の質問です。

5点目、これはなかなか難しい問題かもしれませんが、確かにおっしゃるとおりボランティアな組織であって業務命令が一切効かないので時間が掛かるということはよく理解できるんですけども、ただ、これだけ変わっていく世の中の中で時間が掛かるということを言っていて本当にいいんだろうかというのが率直な感想なんですけれども、その辺についてのお考えがあればというふうに思っています。

すみません、ちょっと失礼なことも申し上げたかもしれませんが、以上5点の質問でございます。

○ ありがとうございます。

ほかの方々も手が挙がっていますので、まずは御質問あるいはコメントを頂いてからと考えております。どうぞ。

○ 御説明ありがとうございました。

私からも幾つか御質問がございます。一つは、中長期的視点、俯瞰的、分野横断的、そうした大きなテーマにシフトしていくというお話でした。カーボンニュートラルについての御紹介を頂きましたけれども、学術会議として将来を見据えて、そうしたテーマを新しく作り上げていく機能が必要だと感じました。新しいテーマを作り上げていくメカニズムが、3部制のことなども含めてどのような形で今後進められていき得るかについてお尋ねしたいというのが1点です。

それから、冒頭にお話がありましたが、常勤のスタッフがいらっしゃらない、非常勤でフラ

ットな組織であると伺いました。これまでも事務局機能の強化は論点に上がっていたと思うのですが、継続的な形で中長期的な戦略を立てながら動いていくと考えたときに、安定的な体制が必要になってこないのか、ということがございます。これが2点目です。

もう一つは、それと関連して会員の方々が、私が伺っている範囲ですと、期が変わると体制が変わるので、いろんなことが変化していくとお伺いしたことがありました。期をまたいで中長期的にある方針でしっかり進めていくということについては、今現状の会員の例えば任期や選考方法との関係で、何らかの改善ができるのでしょうか。

私からは、この三つの観点でお伺いしたいと思います。

○ ありがとうございます。

それでは、よろしくお願いします。

○ ありがとうございます。

私からも3点御質問したい。今年の4月22日のまとめた参考資料に付いている「より良い役割発揮に向けて」というペーパーを詳細に読ませていただきました。冒頭のところで学術会議の役割を果たしていくために五つの要件があるという立てつけになっていますが、1番目の御質問は、科学技術の位置づけが国家的な意味において変わってきている中で、ここで言っている日本学術会議の役割も変わってきていると認識されておられるのかそうでないのかという点です。先ほどお話があった様に、そうした大きなテーマを取り上げようというような方向性を出されているのは、恐らく学術会議の方々自身としてその役割というのが変わってきているという認識に基づいて考えておられるのではないかというふうに推測するんですが、そういう認識でいいのかどうか。すなわち学術会議の役割が変わってきているという脈絡の中でこの議論が進んでいるのかどうかというのが1点目です。

2点目は、それに関わる問題なんですが、先ほどの全米の科学アカデミー、17ページの一番左の検討事項の明確化についての質問です。今後はカーボンニュートラルあるいは自然災害ということだけではなくて、大きな社会課題、例えばパンデミックもそうですし、サイバーテロや、AIの倫理あるいは、格差の是正の様な大きな社会的テーマも学術会議として取り上げるということになるのかどうか、これが2点目です。

3点目、やはり今後重要なのは広報機能と事務局機能の強化ということだと思います。そうなってくると、学術会議の組織そのもののかなり大幅な変更を来すということになるのではないかと思います。例えば財務状況の問題とか、あるいは要員確保の問題とか、こういったもの

に全て絡んでくるのではないかと思います。一言で広報機能の強化、事務機能の強化と言っても、考え方次第でインパクトが全然違ってくるし、ひいては組織の意思決定にも関わってくる問題だと思いますので、その点をどのように考えたらよろしいか、以上3点でございます。

○ ありがとうございます。 それでは、どうぞ。

○ ありがとうございます。

私からは会員と意見交換をされたというところについて少しお伺いしたいと思います。何かを改革、変革しようとする、価値観の違う人をどう入れて、どういう意見を聴いていくかということが非常に重要だと思っております。そこで、会員の中で、若手の方々からの意見について、何か特徴的な方向性や違いが出ているのかどうかということを伺いたいと思います。企業においても、シニアの人たちが考える方向と若手の意見とは全然違います。価値観の異なる若手の考え方、見方について、どういう傾向があるのか、見えてきたことがあれば、教えていただきたいと思いました。

同様に、会員の中で産業界の方の意見として何か特徴的なことがあるのであれば、それも教えていただきたいと思います。 よろしくをお願いします。

○ ありがとうございます。 どうぞ。

○ 今回、社会の重要な課題についてこれから学術会議が真剣に向き合っていくことを考えられているということ、また、それが学術会議の中でも賛同が得られているということは大変すばらしいです。そのようなことについて多様な分野の専門家が集まって議論することは、恐らく学術会議でなくてはできない大切な役割ではないかと考えます。

一方で、そのような場合には、研究者自身の専門を超えた議論になりますので、そのための資料収集や分析のための事務機能というものの強化なしではやっていけないのではないかと思います。今後、学術会議としてどのようにして今回ご提案されたことを実現していくのか、もし御検討されていることがあれば教えていただきたく存じます。

また、社会と学術との関係が非常に密接になり、複雑になり、学術の社会における役割が大きく変わってきている中において、社会からの声若しくは社会からの信頼をどのように実現していくかということは非常に重要になります。そのようなことについてもどのように進めていくのか、より具体的に検討されていることがあれば教えていただきたく存じます。

○ ありがとうございます。 どうぞ。

○ 随分時間を掛けて議論していただいているということにはよく分かりました。 どうもありが

とうございました。

梶田会長の説明された意見交換の概要についてというところで、この2番目と3番目、提言の見直しに関する意見及び会員選考プロセスの見直しに対する意見を伺い、少なくとも私の問題意識とは一致していると感じました。提言等に関しては、ここに書いているように求められているもの、あるいは本来あるべきものは自分のバックグラウンドであり、自分の分野の代表者として話すのではなく、一学術分野の知識を持った人として国のために、あるいは社会のために発信していただくということだと思います。そこが今回すごく明確に書かれていて、会員の皆さんが認識されたのではないかと思います。

私も以前、学術会議会員を6年ほどやってきましたから経験がありますが、とても感じたのは、どうしても自分の分野の代表的な気持ちが残ってしまう。これは、一つはやはりマスタープランの策定を行うプロセスにおいては、専門性がないとできませんから、専門的な立場からけんけんがくがくとした議論を行い、何が重要かということをやりますよね。それにより自分のバックグラウンド、自分の学術分野の代表のような気持ちになってしまう。それではまずいということは何回も私は申し上げましたけれども、どうしてもそれがある程度尾を引いているというのか、気持ちの中に残っているような気がしていました、ずっと。

今回のいろいろな議論の中で、その部分がかなり明確に会員の間で共有されたのかなという気がいたします。正に私たちが学術会議に望むこと、政府が望むこと、社会が望むことということに一致してきているような気がいたしますので、より明確に学術会議会員の役割として個々の学問分野の代表ではなく、学術全体を代表する立場で参加し、意見を述べるということに記載していただきたいと思います。このことは会員選考プロセスの見直しということにも関わってくると思います。現在の選考方式になった経緯等々を井村先生に以前、この会議で説明していただきましたが、以前の方式の選挙方式だったら、学会の代表者として選ばれてしまう。そうすると、学会の代表者として発言してしまう。そうではないということを明確にするために現在の選考方式にしたんだということを明確におっしゃっていました。

しかし、現実には先ほど申し上げたようにそうではないケースも多々あるように思います。自分の学術分野の知識の代表はいいんですけれども、利益団体の代表になったような発言は決してしてはいけないということが明確になれば、ある意味でこのコ・オペレーション方式、現在の方式の正当性というのは担保できると思いました。一方で、ここで議論されたように新しい分野等々の展開を考えたときに、それとは違ったメカニズムを導入するということも必要な

のかなとも思ひまして、そういう意味ではここに書かれていることというのは、少なくとも私の問題意識の中で整理したときにかなり近づいているのかなという気がしております。

以上、感想です。

○ では、今幾つか質問なり学術会議として答えていただかなければならないという点もありましたのでお願いいたします。

○ ありがとうございます。

今日頂いた御質問について、私たちも基本的にはほとんど全ての項目について、真剣にこの1年間考えてまいりました。具体的には別の方から説明してもらった方がいいかと思いますが、これらの点について考えていますし、かつ今後も改革を進め続けるつもりでおりますので、よろしくをお願いいたします。

○ 進捗状況の自己評価なんですけれども、現在、外部評価委員のアサインがちょうど終わったところでございまして、外部評価委員の先生方に今から御説明するという形になります。年に1回はどういう形で進んだかというのを評価いただく。自分たちの自己評価としては、毎回の幹事会の中でどれだけ進んだか、それから、例えば広報で新たなアドバイザーで科学番組の元ディレクターをお願いしたとか、そういう今までの学術会議ではあり得なかった画期的なことをやっているんですけれども、なかなかそこは今のところ表に出てきませんが、一つずつはチェックをしながら進んでいるという状況です。それが全体的にどうなるかは、外部評価委員の先生方にも必要なことを言っていただくという形になっています。

それで、あと3部制と国民との関連は別の方からお願いします。

○ たくさん質問を頂きまして、ありがとうございます。

幾つか質問いただいているので、全部個別にお答えするというのは難しいので、まとめて答える部分があるかと思いますが、5要件に関してアカデミーとしての立論だと言い切ると、国民と遊離するのではないかという話なんです、これは我々が提案しているということです、そうではないという議論があるのであれば是非議論したいと、そういうスタンスでございまして、別に国民と遊離しようということではなく、むしろ対話をこれからちゃんとやっていきたいという意味で考えております。

それから、5要件を踏まえての役割が変わってきたんじゃないか、そういう認識があるのかという御質問ですが、これは当然、その認識がございまして。先ほどの国際的な学術会議のアカデミーの動向で、科学的助言という方向にかじを切っているというのは共通の潮流であるとい

うふうに申したとおりであります。実は、私は科学哲学と科学技術論の専門家でございまして、この辺りのところは大変よくフォローしてきたつもりでございまして。

そして、現在、21世紀になってから特に科学技術は社会との関わりが大きく変化してインターフェースの様相が変わり、そして、人文社会科学的な視点を入れなければ、もはや科学技術を社会に実装することができない。さらには、イノベーションという観点で科学技術を考えるという力が強くなってきている。そういうところで、海外でも理工系と社会科学系の国際団体は分かれていたのが統合されると、そういうことが起こっているわけですね。その意味では、学術会議は結果的に最初から3部制であったということがプラスに働くだらうと思っておりまして、そのメリットを最大限生かすような活動に切り替えていきたいと、これが我々の思いでございまして。

ですから、当然大きなテーマというものは行っていくということですので、これで3部制のメリットは何かというところは、今のような考え方であるとお答えしたいと思います。もっと細かくいろいろ言えるんですけども、ちょっと時間がございませんので、このぐらいにさせていただきます。

それから、コ・オペレーションの議論ですが、これは限界を感じないのかという御質問かと思いますが、今回明瞭に報告書にも書きましたけれども、従来どういう選考基準で次期の105名を選ぶのかというふうな基準を公表しておりませんでした。もとより105名で日本の学術全てを代表することは不可能なほど学術の世界は複雑になって、多様になってきているわけですから、その105名というのには限界があるという意味では御指摘のとおりであります。

また、世界の重要諸課題に迅速に対応するために今何が必要かという観点で、選考にややめり張りを付ける必要があるだろうと考えています。そのための工夫として、選考方針というのは学術会議として原案を作りますが、それを広く社会の方々、産業界の方々、いろんな方々と議論してこういう方針で行くということはちゃんとお示ししたいと思います。その上で我々は選考するということを今考えております。

それから、各部70名というのはおおむねのめどでありまして、法的に規定されているのは210名という数字だけでございまして。しかし、それをどういう基準で動かすかというのはそんなに簡単な話ではございません。これも報告書に書いております。しかし、選考委員会として部にとらわれないような人選をするという仕組みを入れることによって、次期に取り組まねばならないテーマにふさわしい人間を選ぶと、そういう工夫をこれから考えていくということ

も報告書に書いてございます。

ですので、コ・オペレーションというものについては世界共通のアカデミーの原則ではございますが、それをどのように柔軟に社会の課題に対応するかというところを今議論していると、そういうふうにお考えいただきたいと思います。

そういうことを考えていきますと、広報、事務局機能の強化というのはマストではないかという御指摘がございましたが、全くそのとおりでございます。しかし、4月の段階でそれを最初から掲げるということは到底受け入れられないような世の中の雰囲気ではございましたので、抑制的には書いておりますが、本当にちゃんとやろうとすると大きな組織の変更とかそういうものも考えなくてははいけません。財政構造も考えなくてははいけません。それが時間軸、それから、手順というものをちゃんと考えてやっていくというのであれば、我々は可能だと考えておりますが、そこは先生方、議員の方々の見識ある御議論を待ちたいと思っております。

全部は答え切れておりませんが、取りあえず。

○ 私の方も少し。テーマ設定と事務局機能、それから、それぞれ分科会をどうするかというのを少しまとめて御回答させていただきたいと思います。

実は、提言のほかに見解を作ったというのはカテゴリーが一つ増えたかというふうに思う方も多いかと思いますが、実はとても大きな仕組みを考えながら今進めているということをお話ししたいと思います。

一つは、従来の個別分野の中だけの議論をして提言に出すというのをお役目だと考えている方々は結構多くいらっしゃいました。今回もこういうふうな「見解」という形でグレードダウンをするんだという意見もいっぱい頂きました。一方で、中にはやはり中長期的なテーマを少しちゃんとやろう、それから、分科会同士が何をやっているのかも知って考えていこうという会員もあり、そのための仕組みの一つが連絡会議です。

もう一つは、そういうグループでの検討内容が提言として体を成すのかというふうなことを相談する窓口を作ることです。この窓口を通じて自然発生的に分科会がどういうテーマであればいいんだというのを自分たちで考えるという機会を与えたい。今日の報告書の中にも書いてありますけれども、総合企画調査推進チームという事務方がありますけれども、これは過去の提言、それから、各分科会の活動をフォローしながら、どういう要件が必要かに関する相談窓口にしていくつもりでおります。ただし、どうしても分科会の主張があればそのとおりになるかどうかはまた別の問題ですけれども、提言に向けた検討中に学術会議のテーマは何か

というものを外部との対話の中で拾ってきたものを入れていくという仕組みを今考えております。それは外部との連携強化に関する分科会の中で、産業界、それから、教育界、いろんな大学等々の意見が入ったものを検討の中に入れて組み替えていく。必然的にその分科会の存在価値も問われることになると思います。

これは1年の間にすぐそれが変わるものではありませんけれども、1期、2期と変えていくうちには大変違ったものになると思います。先ほど前期までに6年間会員をなされていたときには、そういうことは一度もありませんでした。もう提言を書いて出して終わって、文句言われて、いや、やっと出たよというふうな、そういうプロセスを今まで幾つもやってきたわけですが、今回のここに書いてある会員の意識変革というのはそういう意味です。これは会員の選考にも影響してきます。こうした方向性にふさわしい方を是非入れて、自分の専門は専門として俯瞰的な意見を述べる方をどうやって選んでいいかというふうなこともこの前少し議論になりました。そういうことが広がって行って、徐々にやっていくというのが私どもの役目ですけれども、確におっしゃるように今のこの忙しい時間スケールに合わないものを行っているかもしれません。Zoomを使ったりITを使ったりして、今回の意見聴取もそのおかげでできたと思いますし、そのまま事務的なことまで進められるところは進めておりますし、広報の方もできる範囲でやりますけれども、ホームページ一つ変えるにもデジタル庁のお伺いを立てた上でないと今現状は進めないような状況になっておりますので、そこは少し我慢して見ていただければいいかなと思いますが、十分その意識はありますし、会員の中からもそれは強く要請が出ているところであります。

私の方としては以上です。

○ それでは、1点だけ。新しい横断的なテーマをどういうふうに発掘して、設定する仕組み、仕掛けがあるのかという御質問をいただいたかと思います。

連絡会議の設置は、手続き的には幹事会の意見を聴いて会長が決めるということになっておりますけれども、実質的にどう決めていくかという点では、やはり社会の様々な意見を聴いていくということは非常に重要だと思っております。カーボンニュートラルの連絡会議設置にあたって、経済界、そして当然この分野の研究者、専門家の意見をうかがったことも、こうしたテーマを設定する背景でもございました。当然検討の過程でもこうした意見、例えば東京大学でも日立東大ラボで同じようなこの分野の研究をされている方々がいらっしゃるわけですが、こうした方々とうまく連携をし、意見を聴きながら進めるということが必要だという

ふうに思っております。

悩ましさは、横断的なテーマを進めていく上でも、ご指摘のあったように、当然その分野で優れた方がその検討に関わっていただかないと横断的・俯瞰的な質の高い助言が出せないという点です。したがって、そうしたそれぞれの分野の優れた会員、連携会員の力をうまく引き出しながら横断的なテーマを進めていくこと。このためには恐らく我々の工夫も必要ですけれども、事務局をはじめ後方支援の体制は非常に重要だというふうに思っております。

以上です。

○ もう一点、若手の意見をどう取り入れているかという点に関して御質問がありました。

学術会議では、45歳未満の若手の会員、連携会員約50名から成る若手アカデミーという組織を持っております。こちらの若手アカデミーとは、随時、会長・副会長と意見交換の場を持つような形を取っております。今回の新しい提言の在り方に関しましても、来週ですが、この若手アカデミーとの意見交換会を行う予定にしております。

以上です。

○ すみません。期をまたいで体制が継続できるかという御質問があったかと思います。これについては昨年来、真剣に検討しておりまして、例えばカーボンニュートラルあるいはパンデミックに関する連絡会議を設けましたが、これらは期をまたぐということを前提に制度設計いたしました。また、例えば先ほど国際活動の戦略を作っていると言いましたが、これも学術会議では多分初めてですが、期を超えて5年間の国際活動の戦略を作ることによって、明らかに我々の思いとしては長期を見据えての活動を考えています。

以上です。

○ ありがとうございます。どうぞ。

○ いろいろ御説明いただきまして、ありがとうございました。

コ・オペレーション方式、先ほど別の方からもございましたけれども、コ・オペレーション方式が駄目なのではなくて、コ・オペレーション方式をどうやって運用していくか、運用の仕方を間違ってしまうと本当にどうしようもないものになってしまっていて、新しい分野の人間が選ばれたりしないということから、コ・オペレーション方式の運用をこれから変えていくんだということを伺ったので、是非そのことをお願いできればと思っています。

あと、3部制については過去を見ていると、僕から見ると何かサイロに閉じ籠もっている。要するに何かもう別々に自分たちは自分たちの道を歩むというふうな活動が多かったのでは、

私はどちらかというと、もう1部制にしたらどうですかというような気持ちで3部制のメリットは何ですかと伺ったんですけれども、それについてもこれから網羅的・横断的な検討を中心にやっていかれるということなので、是非お願いできればと思っています。

○ ありがとうございます。

○ では、簡単に。コ・オペレーション等のところは全く同意意見でございます。ありがとうございます。

○ ありがとうございます。

先ほどから報告書にはちゃんと書いてありますというご発言が何度かありましたが、ちょっと誤解があるかなと思っています。我々は報告書を丹念に読んでいますので、報告書に書いてあることを詳しく説明してほしいと思っているわけではない。報告書に書けなかったことも含めて、せっかくクローズドにしているので話してくださいと、そういうスタンスなので、多分誤解していると思います。今、3部制の話も出ましたけれども、これはずっと七十何名でもう固定されている、固定していくのはなぜなのか。固定していかないとすれば、それが変わるといのはどういうタイミングでどういう形で、今の現状公にできないけれども考えているのかという話題や、あるいは事務局機能の強化という話が出てきました。これは財源として具体的にどんな話をされているのか、そのような書かれていないけれども重要な情報を欲しいと思っています。

あるいはもう一つちょっと分からないなと思ったのは、学術アカデミーは独立しているということが最も重要なのではなく、国を代表する組織として認識されていることが重要なのだというご発言がありました。私は、学術会議のようなアカデミーは独立した組織でなければならないというのがどの国のアカデミーでも共有認識だしアカデミーの根幹だと思ってきました。独立というのは別に組織として独立じゃないですよ。つまり独自の体現を持っているということとはとても重要だと基本的には思っているんですが、そういうことに関してどうお考えになっているのかということがちょっと聞きたいなと思ったんです。

○ レスponsする時間を頂けますか、少し。

いや、独立した法人格によって独立を定義するものではないですよと言っているのであって、学術の独立性をどういう形で表現するか、それぞれの国の政治体制、法体系に依存しているんだということを申し上げたんです。ですから、学術を代表する特別な存在として機能できるようにするための仕組みとして独立した法人格が必要であるとは限らないということで、日本の

場合には政治的知恵として政府の機関として置いたけれども、その運用に関して独立性を認めるという中曽根大臣の答弁のようなああいうやり方であり得ただろうし、それは一つの知恵だろうと思っているという意味です。もちろん独立させるということであれば様々なところに影響がありますので、そこも含めて、だから、特殊法人としてきちっと体系、法整備ができて、それから、例えばアメリカのグラントのような形で省庁が一定の資金を出すといったように、やや法律的に決められているような安定的な財源が年度またぎで支払われる、そういう仕組みまで作っていただけるのなら別ですけども、J S T、J S P Sにそれはできますか、単年度会計の日本でできますかという話になっちゃうでしょう。だから、その辺りの仕組みもセットになりますよということを申し上げている。

それで、3部制のことは先ほどちらと申しましたが、各部70名という定員の定めはありません。210名という定員があるだけです。そもそも210という数字でよいのかという問題はあろうかと思えます。そして、70、70、70を機械的に割り振ることが未来永劫続くというふうに私は思わない。学問の分野の分け方というのは変わり得るということを多分議員はおっしゃっているんだろうと思いますが、その可能性は十分あります。

ただ、当面、航海中の船でございますので、そのときには選考委員会枠というものを増やすことによって、その3部制のサイロを少しずつ緩めていくというやり方もあろうかというふうに思っております。

○ それに関しては、今もうこの前、梶田会長から会員の枠の拡大をしたいというふうな提言をなさり、その意見も聴いております。したがって、別に7部から3部になった、3部はどうなっているのかという議論はこれからまた進めることになると思いますけれども、連携会員は部に所属しておりませんので、1部から3部まで全部一緒です。ただ、どこの委員会に所属するかによって色分けがされていると、そういうふうな状況です。

○ ありがとうございます。

今日はクローズドにさせていただいて、学術会議側から論客の方たちが集まりましたので、大変活発な意見交換ができたと思っております。こういうプロセスこそが学術会議とC S T Iの関係性とともにやっぱり関わってくると思いますので、実は我々は橋本先生と篠原議員が作られた創発事業のときもそうでしたし、科学技術基本法のときもそうでしたが、かなり学術会議とはいい関係でご意見を頂き、学術会議からは感謝状まで頂いていますから。その意味では、もともと敵対的な関係などありません。こういうクローズドなところでこういう率直な議論が

できるということは大変有り難いと思っております。

議論自体はこれでちょっと15分ほど過ぎてしまって大変申し訳ございませんでした。議事概要の公表に際して、学術会議の菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事、及びC S T I 有識者議員の皆様の御発言部分について、それぞれ御確認を頂いた上で発言者を伏した形で約1か月後に公表させていただきます。

今日は本当に長時間にわたりまして、菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林幹事、どうもありがとうございました。

○ どうもありがとうございました。

○ 本日は有識者議員からいろんな御意見を頂き、活発な議論ができたと思います。一方、十分にまだ議論し切れなかった点も残っていると思いますので、今日の議論を学術会議に持ってお帰りになられて、改めてよく整理をしていただき、本日触れられなかった論点とともに次回議論を深めていきたいというふうに考えております。

いずれにしても、日程や詳細については追って事務局からお知らせをさせていただくことにします。

どうもありがとうございました。

午後 0時16分 閉会